

平成 29 年度

地球環境「自然学」講座

第 1 回

テーマ

平成 29 年度「自然学講座」のねらい
-いのちのふるさと海と生きる-

講師

京 都 大 学 名 誉 教 授
舞 根 森 里 海 研 究 所 長
当 講 座 コーディネーター

田 中 克 先 生

平成 29 年 4 月 8 日(土)

NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

田中 克 (たなか まさる)

「略歴」

1943 年 4 月 滋賀県大津市生まれ
1962 年 3 月 滋賀県立膳所高等学校卒業
1966 年 3 月 京都大学農学部水産学科卒業
1966 年 4 月 京都大学農学部修士課程水産学専攻入学
1973 年 3 月 京都大学農学部博士後期課程水産学専攻退学
1973 年 4 月 京都大学農学部研修員(日本学術振興会研究員)
1974 年 4 月 水産庁東海区水産研究所(東京) 企画連絡室研究員
1974 年 5 月 水産庁西海区水産研究所(長崎) 海洋部研究員
1982 年 7 月 京都大学農学部水産学科 助教授
1993 年 4 月 京都大学農学部水産学科 教授
1997 年 4 月 京都大学大学院農学研究科 教授
2001 年 4 月 京都大学大学院農学研究科 評議員
2003 年 4 月 京都大学フィールド科学教育研究センター長
2007 年 3 月 京都大学定年退職
2007 年 4 月 NPO 法人ものづくり生命文明機構 理事
2007 年 8 月 マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所 客員教授
2008 年 9 月 マレーシアサバ大学持続農学部 客員教授
2009 年 6 月 NPO 法人森は海の恋人(気仙沼) 理事
2010 年 7 月 財団法人国際高等研究所(京都) フェロー
2013 年 4 月 NPO 法人 SPERA 森里海・時代を拓く(柳川) 理事
2014 年 4 月 舞根森里海研究所長
2015 年 9 月 NPO 法人海遍路(鹿児島) 理事
2016 年 4 月 NPO 法人 SPERA 森里海・時代を拓く 理事長代行



「現在進行中の各種委員など」

文部科学省海洋生物小委員会主査(2010 年度～)
文部科学省東北マリンサイエンス拠点形成事業主査(2011 年度～)
奈良県東アジアサマースクール講師(2012 年度～)
滋賀県マザーレイク 21 計画学術フォーラム委員(2013 年度～)
認定 NPO 法人アースウォッチ・ジャパン科学委員会委員(2014 年度～)
京都市環境保全協議会評議員(2015 年度～)
地球システム・倫理学会理事(2015 年度～)

環境省つなげよう支えよう森里川海プロジェクト絵本作成委員会委員(2016 年度～)

総合地球環境学研究所研究プロジェクト外部評価委員会委員(2016 年度～)

(大学での講義など)

日本文理大学「森里海連環学」非常勤講師(2009 年～)

福井県立大学生物資源学部「山川里海連関学」非常勤講師(2010 年～)

京都大学森里海連環学ユニット提供「森里海連環学」非常勤講師(2013 年～)

「主な著書」

魚類学(下)(共著) 恒星社厚生閣、1998

森里海連環学への道 旬報社、2008

稚魚学ー多様な生理生態を探る(共編) 生物研究社、2008

稚魚ー生残と変態の生理生態学(共編) 京都大学学術出版会、2009

干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさと危機(共著) 東海大学出版会、2009

水産の 21 世紀ー海から拓く食料自給(共編) 京都大学学術出版会、2010

増補改訂森里海連環学ー森から海までの総合管理を目指して(共著) 京都大学学術出版会、2011

森と海を結ぶ川ー沿岸域再生のために(共著) 京都大学学術出版会、2012

森里海連環による有明海再生ー一心に森を育む(共編) 花乱社、2014

防災と復興の知-3・11 以後を生きる(共著) 大学出版部協会、2014

大槌発 未来のグランドデザインー震災復興と地域の自然・文化 昭和堂、2016

いのちのふるさと海と生きる(編) 花乱社、2017

女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来(共編) 昭和堂、2017

平成 29 年度「自然学講座」のねらい ーいのちのふるさと海と生きるー

1. いのちのふるさと海と生きる

平成 27 年度から地球環境自然学講座は、「森里海のつながりーいのちの循環」をメインテーマに進められています。これまで 2 年間の講義を終え、今年度は、5 年計画の三年目の中間年に当たり、後半の 2 年につなぐ重要な節目になります。森里海のつながりは、いのちの循環の大元となる自然の仕組みとそれを持続的に維持する人々の営みに深く関わるといえます。その意味では、いのちの継承に直接関わる女性がとりわけ重要な役割を担う課題と思われます。しかし、現状は女性が輝く環境にはなっていません。

今年度の講義では、現場で楽天的に、柔軟に、したたかに行動されている多くの女性の皆さんに登壇いただき、「女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」を学びたいと考えています。これまでに本講座に登壇いただきました向井宏さん、松田治さん、山岡耕作さん、八幡暁さん、畠山重篤さんが執筆された論文が収められた本「いのちのふるさと海と生きる」（花乱社）が 5 月末に刊行されます。これらの皆さん以外に多くの方々に寄稿いただいています、それらの方の何人かは今後の講座で講義をいただく可能性のある方々です。

一方、同じく本年 5 月末に全て女性ばかりの執筆陣による「女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」（昭和堂）が刊行されます。こちらには、昨年度講義をしていただきました小西晴子さん、今年度に講義をいただく予定の江崎貴久さん、山口美知子さん、遠藤愛子さん、下村委津子さん、井手洋子さんに寄稿いただいています。二つの本は、本講座の予習、復習のテキストになるものと思います。本講座の学びの意味を考える素材になることを願っています。

これら 2 冊の本の構成は以下のようです。

『いのちのふるさと海と生きる』（田中克編；花乱社）

はじめに「いのちのふるさと海と生きる」が問いかけるもの 田中 克

第1章 生物の進化と文明の歴史を見つめる

人類の遠い祖先を海に訪ねて 私たちは魚である 西田 睦

環太平洋文明から日本の未来を見据える「命の水」の循環 安田喜憲

第2章 海拔 0 メートルから海辺の暮らしをみる

「青い」地球を守りたい 向井 宏

里海 Satoumi からみた未来 松田 治

海遍路 黒潮流域に幸せの原点を探しに 山岡耕作

環境 X 暮らし=未来 シーカヤックはタイムマシン 八幡 暁
第3章 「森里海連環学」の時代 津波の海とともに生きる未来
つながりの時代を拓く「森里海連環学」 田中 克
気仙沼舞根湾からの発信 防潮堤といのち 横山勝英
第4章「森は海の恋人」は海を越えて 畠山重篤
第5章 学生・大学・経済・行政も連環して
若者が描く「有明海塾」の挑戦 有明海塾
森から海までのつながりの科学と教育 山下 洋
自然資本経済の勧め 日本モデルが世界を救う 谷口正次
自然の恵みを将来にわたって享受していくために「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」 中井徳太郎
おわりに いのちと「命」 未来世代へのメッセージ 田中 克

『女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来』（下村委津子・小鮎由起子・田中 克編；昭和堂）

はじめに 下村委津子・小鮎由起子
行き交う人のふるさとー気仙沼からハワイを旅して 松永智子
故郷の海、有明海 井手洋子
海を懐かしく思うわけー京都の老舗に生まれて 鈴鹿可奈子
ドキュメンタリー映画「赤浜ロックンロール」で描く三陸 浜の心意気ー海がみえねえじゃねえか、バカヤローー 小西晴子
地球が生んだ「いのちの戦略」と「アジアの生活の知恵」から生まれた心身一体科学ー森・里・海・体・細胞をつなぐ原理 跡見順子
海女の町の観光ー女将とガイドを通じて 江崎貴久
森里川海のつながりを生かした共生型循環社会 山口美知子
「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクトとつながろう 中尾文子
水を巡る地球環境安全保障ー水・エネルギー・食料ネクサス 遠藤愛子
環境問題の本質としてのいのち 下村委津子
森の採譜 丹治富美子
挿画に寄せてーその自然環境を守りたいという気持ちが生まれる場所 白幡美晴
おわりに 森から海を見るーいのちのつながり 田中 克

2. いのちと命ー未来世代へのメッセージ

本書の刊行を企画したもっとも大きな背景は、二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災にあります。個人的には、今を生きる意味を問い直す大きな転機となりました。具体的には、二〇一一年四月三〇日に、再起不能とも思える甚大な被災を受けた宮城県気仙

沼市唐桑町舞根湾の海辺で開催された「森は海の恋人緊急支援現地研究会」が契機となりました。それは、今世紀初めより、本書の執筆者の一人でもある安田喜憲先生（現ふじのくに環境史ミュージアム館長；当時は、国際日本文化研究センター教授）が、同じく執筆者の谷口正次さんや中井徳太郎さんをはじめ、多くの分野の研究者、行政関係者、社会運動家などの輪を広げながら進められて来ました「環境・経済・文明」研究会の主催によるものです。そこには、「森は海の恋人」こそ震災復興を乗り越えて、新たな持続可能社会を築く理念に違いないとの考えのもと、少しでも震災復興に役立ちたいとの思いに溢れる人々が全国から集まりました。

その集会の直接的な目的は、一九八九年に「森は海の恋人」という比類なき叙情的メッセージのもとに漁師による森づくりの先鞭をつけられた気仙沼の牡蠣養殖漁師であり、研究会のメンバーでもあった畠山重篤さんを激励し、地域社会再生の柱となる早期の養殖業再開への支援の輪を広げようとするものでした。多くの皆さんがそれぞれに震災復興への思いを語られた後、全ての船や養殖資材ばかりか最愛のお母さんまでも失くされた畠山さんがお礼の言葉を述べられました。「海に恨みはない。海辺は壊れても、海と漁業は必ず復活する。ここには確かな森があるから」と。その魂のひと言に、被災された皆さんを激励に来たつもり自分たちが、逆に大きく励まされるという、思いもよらない感動が広がりました。

本書に執筆いただきました皆さんの専門分野は実に多様です。しかし、多様な文化や自然をモノトーンに染め上げようする現実社会を見つめ直し、もう一度多様性に満ちた世界を築き直そうとの思いが、根底に流れています。多様性は、空間と時間を介して輻輳的につながる世界に違いありません。それは、「縁の下での力持ち」のような存在とも言えるでしょう。あるいは自然と社会を支える「地球免疫システム」とも言えるかもしれません。今の社会は、水面上の氷山を支える一〇倍もの水面下の見えない氷の塊を潰し続け、逆三角形型の社会になりつつあるように思われます。その先に何が起こるかが目に見え始めてきました。本書は、続く世代のために今を生きる私たちが、自然や社会を下支えする「縁の下での力持ち」を築き直そうとする趣旨のもとに刊行するものです。本書の執筆を快諾された皆さんからの多くの深いメッセージを纏め上げることは編者の力量の及ぶところではありませんが、各稿の要点を受け止め、それらをつなぎながら全体像を描き出し、あとがきに代えたいと思います。

まず最初の西田睦さんの「私達は陸に上がった魚である」との科学的根拠の提示は“目から鱗”そのものといえます。しかも、「いのちはリアルにつながっている」との指摘は、「いのちのふるさと海」を考える上で、不可欠の視点とされます。そして、その命を支える水の循環を土台にした文明、造山活動が盛んな環太平洋域に培われてきた稲作漁撈文明やそれに相対する文明は、安田喜憲さんが指摘されている通り、これからの世界が目指す持続循環社会の根底に据えるべき先人からの贈り物だと思われます。命の源である水の循環の大元は山にあり、稲作漁撈文明が山を崇拝する由縁です。海に生まれた私たちの遠

い祖先は陸に生活圏を移し、進化を重ねた後、アフリカのナイル川源流域の熱帯雨林の中で類人猿からヒトに進化したと考えられています。つまり、私たちの遠いふるさは海であり、近いふるさは森なのです。私たちの歴史は海と森に深く関わってきたのです。森と海が不可分につながるこの意味がここにもあると言えます。

森と海の結節点は水辺（海辺）です。わが国では、その水辺がこの上なく痛めつけられ、生きものたちを絶滅の危機に陥れていることに、正面から問題を提起をされているのが向井宏さんと横山勝英さんです。お二人の経歴は大きく異なり、向井さんは海の生きものの生態研究者であるのに対し、横山さんは土木工学ご出身の研究者です。そのお二人がそれぞれの立脚点から、ともに水際の深刻極まりない事態に警告を発し、コンクリート文明からの脱却や解消に力を注いでおられるのです。水際は陸と海を結ぶ生態系として、多くの生きものたちに不可欠の存在ですが、同時にそこは人々が自然と折り合いをつけながら、その恵みを享受する持続可能社会のモデルとも言える「里海」の舞台としてもその重要性が高まっています。瀬戸内海に生まれた「里海」もまた日本の優れた叡智であり、松田治さんたちにより、日本各地、さらには世界に里海造りが広められています。これらの背景には、私たちの生き方そのものに根源的な問いかけを行った東日本大震災から学び直そうとする共通点が見られます。

水際は、私達人間だけでなく多くの生きものたちにとって、かけがえのない陸と海をつなぐ結節点ですが、陸に住む私達はどうしても陸側から水辺を見ることになります。陸側からは、見落としがちな水際の実態や人の暮らしを海から見つめ直そうとの取り組みが、これまた研究者と海洋冒険家という異分野の協同として進められています。便利になりすぎた現代社会ではお金や物が幸せの尺度になってしまい、人々は本当の幸せや心の豊かさから次第に遠ざかりつつあるのではないかとの思いから、航空機、車、動力船などでは行けない黒磯流域で海とともに生きる人々の生き様を直接見聞する、人力のシーカヤックを用いた幸せの原点探しの旅が行われました。そこで、山岡耕作さんは、人々の幸せ度の圧倒的高さとその中心に家族があることを見出します。この物とお金に溢れる現代社会は、何を得たかより何を失ったかを問い直すべきであると、世界の水辺をシーカヤックで訪ね歩いて（シーカヤックは海を歩く道具なのです）見つめ直してきた八幡暁さんは、日本とその他の国の水辺の様子に圧倒的な違いがあることを発見されます。それは、水辺で遊び助け合い、ともに生きる知恵やわざを学ぶ子供達が壊滅状態の日本の海辺の異常さです。

二〇一四年五月に実施された「海遍路東北」には編者も参加の機会を得ました。そこで偶然出会った漁師の皆さんは、ここには豊かな海「太平洋銀行」があり、元本に手をつけずに利子だけをいただければ、家族とともに震災の海で幸せに暮らせ、息子や孫もこの家業を継いでくれると、屈託のない笑顔を見せてくれました。それは、まさに谷口正次さんが問題を提起されている「自然資本経済」の本質そのものだといえます。科学としての経済学が市場原理主義を助長し、世界の混迷化に関わるのとは反対に、持続可能社会のあり方を示すものが「太平洋銀行」といえます。そのような持続循環的な自然資本経済を核にす

るような「環境・生命文明」社会の創生を目指した具体的取り組みとして、環境省が中井徳太郎さんを中心に本腰を据えて展開し始めたのが、「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」です。一九八九年に始まった「森は海の恋人」運動と二〇〇三年に誕生した統合学問「森里海連環学」の延長線上に、二〇一四年に国民的大運動を目指して立ち上がった「森里川海プロジェクト」には、この国が本当に立ち直り、世界からいっそう信頼され尊敬される国となり、続く世代にお金や物よりはるかに確かな贈り物を届け得る希望が膨らみます。

そのためには、この運動の主役になるべき若者の台頭を願わずにはいられません。柳川に生まれた有明海塾はその魁として期待されます。わが国は少子高齢化が先行的に進む社会として、その行く末に世界から関心が集まっています。それは、シニア層だけの問題ではなく、続く時代を担う若者がいかに大人世代と連携し、その次の世代としての小中高生などと結び合うという、世代間のつながりの再構築でもあります。時代は動き始めました。二〇〇三年に、編者が初代センター長を務めた京都大学フィールド科学教育研究センターでは、この一〇数年間にわたり森と海の具体的なつながりに関するフィールド研究を、山下洋さんを中心に推進するとともに、全学的な森里海連環学教育を通じてその存在感を高めています。環境省の「森里川海プロジェクト」の全国的な展開の鍵を握るのは、分野横断的思考力と行動力をもった若い人材であり、このプロジェクトと大学教育との具体的連携は、縦割りの仕組みを柔軟にし、いずれは解消に向かわせる重要な契機になると期待されます。

東日本大震災とその復興のなかで鍛えられつつある森里海連環学の具体的課題を海からの視点で言い表したのが「いのちのふるさと海と生きる」です。そのことを、森は海の恋人運動の発展過程に重ね、本書のために、畠山重篤さんが震災後初めて総まとめ的に書き下ろしていただいたのが、第四章の「「森は海の恋人」は海を越えて」です。前述の編者の問題提起のほとんど全てを網羅した内容になっています。森は海の恋人運動は、日本の叡智として世界が大きな期待をもって見守っています。今はグローバル化の嵐の中で、トランプ発言一つで瞬時にしてお金を儲ける人と失う人が現れる不安定な不条理極まりない事態に至り、世界は確かな行く末を見失っています。その中で、自然とともに生きる日本の叡智とそれに根ざした実践が世界に広まり、続く世代に幸せをもたらす空間と時間を通じて結ばれた本来の、ともに生きるグローバル世界の実現を目指したいものです。

東日本大震災が私達に問いかけたものは、地球上の多くの生きものの中で人間（現代人）は、変動する環境に適応して生き残る努力を捨て去り、安易に環境を変える（環境を支配する）ことによって、生き残りを図ろうとする唯一の例外的生物になりつつあることへの警鐘といえます。それは、霞ヶ関の冷暖房の効いた人工空間の中で思いつくパソコンを駆使したアイデアで、氷点下や灼熱の環境のなかで自然とともに懸命に生きようとする震災現場の人々の近未来を決めてしまい、天災の悲劇の上に人災とも言える困難を上塗りする現実として各地に現れています。

震災後に多くの人々の命を救ったのは山から流れ出る水でした。いのちの源である水は、平和や幸せの根源であると言えます。水循環が損なわれれば作物や家畜などの食料生産はたちまち滞り、そこには不可避免的に争いが生まれ、戦争へと広がります。今、私たちができることは何でしょうか。私たちが幸せに心豊かに生きる源である自然は、未来世代から借り受けたものである以上、壊した自然を修復し、元に戻すことが今を生きる私たちの責務といえます。そのためには、全ての価値判断基準を未来世代の幸せ最優先に切り替えられることが求められます。

おりしも、福島県下のいくつかの町では除染が進み、避難先からの帰還が解除されつつあります。六年前に住み慣れたふるさとを一瞬にして奪うことになった福島第一原子力発電所の崩壊。除染によって放射性物質のレベルは低下し、「命」に別状はないから帰還してもよいと言われても、簡単に喜んで帰れるのでしょうか。また、今後の津波対策のために、ここには巨大な防潮堤を造ったので、「命」は保障できると、国や県に言われても、コンクリートの壁に囲まれた環境で人間らしく心豊かに生きていけるのでしょうか。そこには物理的な「命」以上に大切な「いのち」が存在することへの認識や配慮が一切ありません。「ふるさと」とは物理的「命」をはるかに越えて、人と人、人と自然、そしてそれらを時間で結ぶ地域ならでの文化などが統合されて初めて息づく「いのち」が輝く場所だと思われまふ。いのちのふるさと海と生きるとは、そのようなことだと言えるのです。

本書の姉妹編として「女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」（下村委津子・小鮎由起子・田中 克編）がほぼ同時に昭和堂から出版されています。本書とこの姉妹編が相乗効果を発揮し、森里海の連環に代表される多様なつながりの輪がいつそう広がり、未来世代の幸せに結びつくことを願っています。

（2017年5月末刊行予定の「いのちのふるさと海と生きる」（花乱社）のあとがきより）

3. 森から海を思うーいのちのつながり

長野県北部、新潟県との県境近くの黒姫山麓。北信五山と呼ばれる妙高山、斑尾山、戸隠山、飯綱山、そして黒姫山がつらなり、それらの火山の中心に、ゾウ（ナウマンゾウ）がいた湖として有名な野尻湖があります。当時、そのゾウとともに人（野尻湖原人）が暮らしていたに違いないと、その証拠を見つける合同発掘調査が今も二年に一度、春に続けられています。

現役時代に思わぬきっかけから、この黒姫山と野尻湖との間にある「野尻高原大学村」に小さな山小屋を持つことになりました。当時は、宇治市の京阪黄檗駅から朝一番の電車で飛び乗り、京都市内の大文字山近くの研究室に6時過ぎに着き、朝の3時間のみ自分の仕事に集中し、それ以後は夜10時頃まで会議の連続やその資料作りに忙殺される日々が続きました。体力的には少しは自信があったものの、そのような日常は当然心身を大いに疲弊させ、ストレスが蓄積していくことになりました。そんな日々を耐え凌ぐことができたのは、今から考えると、月に一度の週末を黒姫山麓の森の中に身を委ねた結果だったと思

い当たります。

当時は、魚の子供の研究に没頭していましたので、森の存在が人間にとってどのような意味を持つかなどに気付くことはありませんでした。それでも、真冬に一晚に 50 から 60cm もしんと降り積もる“雪の音”が聞こえるような不思議な感覚を覚えることもありました。その後、森の中には人間の耳では聞き取ることのできない高周波の環境音（ハイパーソニック・サウンド）が存在し、それは確実に人間のストレス状態を緩和し、免疫機能を高めるとの全く思いもよらない科学的知見を知ることになりました（大橋力著「音と文明」岩波書店に詳しい）。それは、美しいものにより感動する心の豊かさにも深く関わることに驚きました。音もなく降り注ぐ“雪の音”が聞こえる不思議さも納得できるような気になりました。それは、私たちヒトは熱帯雨林の中で直接の祖先である類人猿から進化し、長く続く氷期を熱帯の森の中で暮らしてきた歴史が、今でもこのような高周波環境音を耳以外の“聴覚器”としての皮膚で感知し、先のような効果（ハイパーソニック・エフェクト）を享受し続けているに違いないと納得しました。その後、極度の精神的疲弊から 2 ヶ月間の休養を余儀なくされましたが、その回復に森での日々、とりわけ春の命が輝き出る日々が本当に効果的であることを実感することになりました。自然とはそのような人知を越えた深く大きな存在なのです。

今、このあとがきを黒姫山麓に広がる黒姫スノーパーク（スキー場）のリフトに乗りながら、リフトを降りた高台から野尻湖を眺めながら、構想しています。現役時代の私なら足元の雪は、雨と違って地下水を形成する上でとても大事な存在に違いないなどと、物事の裏側の世界を想像することはありませんでした。そして、この雪がやがて地下水となって日本海に注ぎ、当時の中心的な研究対象であった波打ち際のヒラメ稚魚を育む存在であることに思いが及ぶことなどありませんでした。今では、もっと現実的な問題として、年金生活の身でありながら、ひまがあれば黒姫に通う私に“冷ややかな”視線を注ぐ家庭の財務大臣に、これは単なるスキー（遊び）ではなく「森と海をつなぐ雪」の意味を考えるための自然観察なのだとの“理論武装”（苦しい言い訳）にもなっています。

リフト直下に厳冬期を生き抜く動物たちの足跡を追いながら、彼らの暮らしを想像したり、深雪の後、カンジキを履いて汗をかきながら道をつけると、翌日その跡に動物（タヌキかキツネ）の足跡が見られ、彼らも省エネの対策を考えているのだと、楽しくなります。湖底からの湧水で冬でも凍結しない温かい野尻湖の湖面からのぼる水蒸気が氷点下 15 度前後まで冷え込む朝の冷氣と風によって、ブナやカラマツなどの小枝に突き刺さるようにして生み出される一面の霧氷の世界に、ただただ感動する自分に、最近では驚かされます。

同じように、ひとは海辺の砂浜に腰を下ろし、水平線から上り始める朝陽や水平線に沈み行く夕陽を見ると、この上なく感動します。それは、海は私たちヒトにとっても、遠い祖先が誕生した場所（究極のふるさと）であり、同時に個人としての出発点が母体の“海の中”であるという誕生の歴史的背景があるからかもしれません。本書のタイトルは、森里海を結ぶ（1）「いのちのふるさと海と生きる」（花乱社、2017 年）の姉妹編として、

森里海を結ぶ（２）「女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」と名付けています。12名の執筆者が全て女性であることは、より確かな未来を拓くのは女性に違いないとの感覚的な受け止めによります。

先行の「いのちのふるさと海と生きる」で、安田喜憲さんは「稲作漁撈文明」こそこれからの持続可能社会の原点だと述べ、それは女性が主役の母系社会だと紹介されています。筆者は、昨年大阪に本部を置く認定NPO法人シニア自然大学校が開設する「地球環境自然学講座」のニュージーランド自然観察会に参加し、マオリの自然観を学ぶフィールドツアーを体験しました。全ての源である大地を母、大空を父、その間に生まれた森や川や海は全て兄弟だとの考えです。それらは全て深く結びついているわけです。ここでも大地の母を中心とする母系社会が、自然とともに歩む持続循環社会を築いて来ました。それは、日本古来の自然観や稲作漁撈文明に通じるものであり、一緒に参加した大阪の熟年女性たちは「何や、うちらと一緒にや」と見事に“総括”されました。

本書は、2015年7月に京都で開催された研究者が語るシンポジウム「いのちのふるさと海と生きる」（（一社）全国日本学士会主催）を受けて、同年9月に東京で、女性ばかりの、より広い分野の皆さんによる「女性が描くいのちのふるさと海と生きる」、ならびにその流れをより大きくするために、2016年8月に京都で開催した同名のシンポジウムで講演いただいた皆さんの原稿と特別寄稿をもとに纏め上げたものです。本書の編集に当たってもっとも「苦労」したのは、女性が執筆する本に、私の名前が表に出てよいのかという点でした。当初は、完全に“黒子”で振舞うつもりでしたが、それでは責任の所在がわからなくなるとの指摘を受け、編者の末席に名を連ねることにしました。

先行した男性ばかりの執筆陣による森里海を結ぶ（１）「いのちのふるさと海と生きる」（花乱社）に引き続き本書を出版したのは、日ごろNPO法人などの活動に触れる中で、私なら（男性なら）問題を頭で考え、理屈を先行させるあまり、障壁にばかり意識が向かって立ち往生しがちであるのに対し、女性は壁をあまり意識せずにその間を何気なくするりと抜けながら道を切り開いていく柔軟な自然体に感心させられて来たからです。女性の柔軟性、楽天性、暮らしに密着した現実性、行動力、何よりもいのちを継承する主役としての存在は、このような時代だからこそしっかり受け止めなければなりません。女性の生きる力に未来を託すべきではないかとの思いが、本書出版の大きなモチベーションとなりました。日本の縦割りの仕組みとコンクリートで固められた社会の現実を柔らかに変えるには、女性の活躍を期待し、応援したいとの思いに駆られています。森里海を結ぶ（１）と（２）を読み比べていただくと日本の未来が見えてくるのではないのでしょうか。本書を編集する間に、執筆者の皆さんの中から、二つの新しい命が誕生するという、この上ないうれしいニュースが飛び込みました。本書が新しい二つのいのちとともに大きく育つことを願って止みません。

（2017年5月末刊行予定「女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」（昭和堂）あとがきより）